

常 照

佛教大学図書館報

56
2007



新図書館竣工10周年記念号

目次

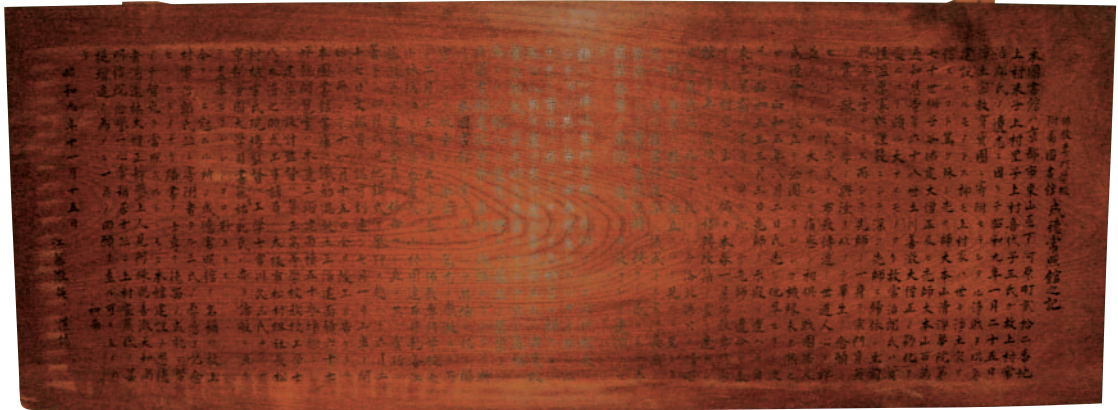
・成徳常照館之記 木額	1
・巻頭言 図書館竣工10周年を迎えて	2
・新図書館開館10周年を祝す	3
・これからの大学図書館の発展を願って	5
・「読書力」以前	6
・新図書館の歩み	7
・古典籍を中心とした主な購入資料(最近10年間)	9
・記念資料紹介『丹鶴叢書』まぼろしの甲寅帙	9
古川千佳	

佛教大学図書館（成徳常照館）

「成徳常照館」、佛教専門学校の頃より代を重ねつつ
本学図書館に受け継がれた名称。

多くの方々のご芳志により生まれ変わって、10年の
歳月が流れた。

このちも佛教大学の知のシンボルとして「成徳常
照館」は、存在し続ける。



成徳常照館之記 木額

佛教專門學校
附屬圖書館 成徳常照館之記

本圖書館ハ京都市東山區下河原町貳拾二番地上村米子上村里子上村喜代子三氏ガ故上村常治郎氏ノ遺志ニヨリテ昭和九年一月二十五日淨土宗教教育資團ニ寄附セラレタル淨財ヲ以テ建設セルモノトス抑モ上村家ハ世々淨土宗ヲ信ズルコト篤ク殊ニ先々師大本山清淨華院第七十世獅子谷佛定大僧正及ビ先師大本山百萬遍知恩寺第六十八世土川善澈大僧正ノ勸化ヲ蒙ルコト頗ル大ナルモノナリ故常治郎氏ハ資性温厚寡黙謹嚴ニシテ深ク先師ニ歸依シ生前膠漆モ啻ナラズ而シテ先師ノ一身ヲ宗門育英ノ業ニ献ゲ宗學ノ興隆ヲ以ツテ畢生ノ念願トセラレシガ氏亦夙ニ布教傳道ノ世道人心に裨益スルトコト大ナルヲ痛感シ相俱ニ財團法人成徳會ノ設立ヲ企圖セラレシガ機縁未ダ熟セザルニ昭和三年八月二日氏先ヅ他界セラレ次イデ昭和五年三月三日先師ノ示寂ニ遭ヘリ爾來五星霜余不肖ノ身ヲ以ツテ先師ノ遺命ヲ承ケテ上村家ニ出入ス偶々本春一月佛教專門學校ハ多年ノ宿願タリシ移轉改築ノ業ヲ達成シテ洛東鹿溪ノ幽邃ヲ後ニシテ洛北榮只ノ明媚ニ移リ白堊ノ雄姿ノ聳立スルヲ見ルニ至レリ然ルニ未ダ圖書館建築ノ議成ラズ宗門最高ノ學府トシテ實ニ畫龍轉睛ヲ缺クノ感アリ余亦建築委員ノ末端ニ連リテ日夜コレヲ遺憾トセリ

テ其ノ事由ヲ具シテコレヲ上村家ニ諮リシニ未亡人米子遺子里子遺孫喜代子三氏ハ當夏故常治郎氏ノ第七回忌正當ニ下リテ其ノ追福ノ爲メニハ故人ノ遺志ヲ體スル最上ノ聖業トシテ圖書館建設資金ノ喜捨ヲ快諾セラレタリ斯クシテ本圖書館ノ業ハ忽ニシテ其緒ニ就キ闔宗コレヲ欣幸トシ舉學ノノ篤志ニ感激セリ乃チ二月十五日淨土宗管長ヨリ佛教專門學校長小林瑞淨ヲ建築委員長ニ小林圓達石井龍善江藤澈英ヲ建築委員ニ任命サレ直ニ其ノ實行ニ着手シ四月六日地鎮式ヲ舉行ス超ヘテ六月二十七日文部省ノ認可到達シ七月一日工事ヲ開始ス而シテ十一月十五日全ク竣工ヲ告ゲタリ本圖書館書庫ハ鐵筋混凝土三階建面積六十七坪餘閱覽室ハ木造二階建面積五十參坪餘ニシテ建築ノ設計監督ハ第三高等學校教授工學士八木清之助氏工事請負ハ大阪市村松組社長松村雄吉氏現場監督ハ工學士宮川久三氏ナルガ京都帝國大學司書藤堂祐範氏ハ亦タ諸般ニ亘リテ盡瘁セラレシトコト渺カラズ

昭和九年十一月十五日

江藤澈英

謹誌

和南

図書館竣工十周年を迎えて

佛教大学長

福 原 隆 善



図書館は大学の頭脳であります。

図書館は図書を収蔵し、これを利用者に活用していただく施設であることは申すまでもございません。しかし、単に図書利用のためだけではなく、貴重な文献資料等の保存の場でもあります。また、最近ではIT化による情報の収集および発信の場でもあります。直接図書を見るのではなく、電子画面を通して文献が見られる時代となっており、世界中の文献が見られるようになってきています。活字化されている古文書等歴史文献について、その文献の原典を確認する必要がありますが、もしデジタル化されていれば簡単に確認できます。その意味でわざわざ外国はじめ所蔵されている現地まで出かけなくても手軽に文献が見られます。

情報発信の一例として、本学浄土宗文献室にのみそろっていた『浄土教報』が、この度デジタル化され、利用者に便宜がはかられています。このように、これからもどんどんIT化は進むことでしょう。辞書や根本資料となるものなどもその流れのなかでデジタル化される方向で進んでいます。

このままデジタル化が進みますと、紙媒体の書籍は不要になってきます。そうすれば場所をとる書庫は必要なくなります。図書館の施設ももっとコンパクトになることでしょう。しかし、近代の活字など歴史資料でない場合はそれで充分ですが、歴史資料など原典的な文献は単に文字が記してあればよいというものではありません。歴史資料には「朱点」や「角筆」など文字には現われない種々の約束事が記されています。資料を読む上で、大変

重要な信号があることがありますから、やはり現物を確認する必要があります。その意味で、図書館には種々の機能が必要となります。収蔵、利用の方法はどんどん多様になってきています。

現図書館（成徳常照館）は、平成九年（1997）に開学80周年の記念事業として建設され、十周年を迎え、ますます充実の一路を歩んでいます。これも歴代館長をはじめ関係各位のご尽力のお蔭と感謝いたしております。

最上階は会議室となっていますが、同時にイベントも開催可能な多目的に使用できるホールでもあり、種々の催物、国際会議・研究会に利用されています。また、ここは市民に開放する施設としても活用しており、開館以降定期的に催物が開かれ、市民の方がたにも大変喜ばれています。

図書館に入ると、まず、右手の「輪蔵」が目に入ってまいります。「輪蔵」は、仏教の聖典すべてをまとめた一切経を納めるためのもので、八角書架の中心に軸をいれて回転するようにしたもので転輪蔵ともいいます。写経や經典読誦の功德を積めない庶民でも、これを一回まわすことにより一切経を一回読んだのと同じ功德が得られると説かれています。この「輪蔵」は浄土宗総本山知恩院経蔵内の輪蔵を縮小複製したもので、真理探究の成就を願い設置されました。

仏教を建学の精神とする佛教大学を寺院の構成でみれば、まさに図書館は寺院の経蔵にあたります。図書館のますますの充実を願っております。

（ふくはら りゅうぜん）

新図書館開館10周年を祝す

図書館長

山 崎 高 哉



新しい佛教大学附属図書館（成徳常照館）は2007（平成19）年4月7日、開館10周年を迎えました。新図書館は、佛教大学開学80周年記念事業の一環として、1981（昭和56）年以来、図書館長の諮問機関「新図書館研究会」によって、さらに1988（昭和63）年及び1990（平成2）年に設置された「新図書館建設検討委員会」によって建設基本構想が検討・策定され、1995（平成7）年1月12日に建設工事に着手されました。工期は約2カ年を要し、1997（平成9）年1月27日に竣工・完成され、新図書館は法然上人ご降誕の日、4月7日に開館されました。それ以来、今年は開館10周年という記念すべき節目の年に当たります。

新図書館開館に至る経緯を調べますと、新図書館の建設は歴代学長、浄土宗教育資団理事の方々を初め、1995（平成7）年に設置された募金事務局を通じてお寄せ頂いた関係各位のご支援・ご協力の賜物であることがよく分かります。本学図書館は「成徳常照館」とも呼び慣わされていますが、これは1934（昭和9）年、佛教大学の前身である佛教専門学校当時、浄土宗檀信徒上村常治郎氏の遺志を受けたご遺族からの資金提供により図書館が建設され、上村家のご厚意を記念するとともに、「緋書ノ士専ラ徳器ノ成就ニ努メテ智光ヲ常照スル」ようにとの意味を込めて「成徳常照館」と命名されたことに由来します。開館10周年を祝うに当たり、成徳常照館といい、

新図書館といい、優れた先人と幾多の有縁の方々の温かいご芳志によって建設されましたことに對し、改めて心から感謝の念を捧げたいと存じます。

新図書館は、延べ床面積10,315㎡、高さ24m、地上5階、地下2階（各階2層）、収蔵可能冊数100万冊、閲覧席数800席でスタートしました。レファレンスコーナー、グループ学習室、AV関係室、マイクロ資料室、対面朗読室等、学術情報センターとして当時最新の機能と快適な学修・教育・研究環境を備えていました。1998（平成10）年5月には、開館1周年を記念して本学同窓会、保護者会等の外郭諸団体によって「輪蔵」が寄贈され、1階アトリウムに設置されました。その後、図書館機能とサービスの一層の充実を図るため、2001（平成13）年と2005（平成17）年に2次にわたる館内リニューアルを行うとともに、2006（平成18）年4月には図書館1階入り口に入退館ゲートを設置し、利用者の安全と資料の保全を図りました。

現在の図書館は、建物の基本構造やスペースはほぼ開館当時のままですが、蔵書数は、2006（平成18）年度現在で、図書が662,752冊から846,402冊へ、雑誌は6,386種から11,897種に増え、閲覧席数も988席（うち学生閲覧席は848席）に増えています。また、年間平均開館日数も310日を上回っています。図書館システムも順次バージョンアップを図り、



十二月あそび正月の図

利用者のためのデータベース構築も飛躍的に充実しました。さらに、高度情報化時代の中で多様化する需要に応えるため、図書館間の相互協力の下、紹介状による閲覧、所蔵・文献調査、文献複写等、利用者サービスにも積極的に対応しています。その結果、2006（平成18）年に社会への説明責任を果たすために受けた大学基準協会による「相互評価・認証評価」におきましても、図書館の閲覧座席数や対面朗読室の整備、「地域との共生」理念に基づいた図書館の開放、専門員制度の導入、通信教育課程の学生のための送本による貸出・返却サービス等に対して高い評価を頂きました。

今日、大学図書館には二つの大きな役割、すなわち学術情報基盤としての役割と学生の学修・教育の基盤としての役割があると指摘されています。前者は情報通信技術の進展によって多様化・大量化している電子媒体による学術情報の収集に努める役割です。後者は学生の学修・教育支援、なかでもどのような情報源を選択し、それをどう整理・表現するかを指導する「情報リテラシー教育」を充実する役割です。本学図書館は、現にこの二つの現代的役割を最大限果たしつつありますが、私個人としましては、それと同時に、とりわけ学生諸君に「一冊の本」との出会いによって専門的知識とともに人生の知恵に豊かに、深く触れる機会を提供することも忘れてはな

らない重要な使命であると考えています。

昨年来、私どもは、新図書館開館10周年記念事業をいつ、どのような形で実施するか、検討を重ねてきました。まず、記念行事ですが、これははできることなら4月7日に開催したいけれども、入学式後のオリエンテーション期間と重なるので避けざるを得ず、開館記念国際シンポジウムが9月下旬に、開館1周年記念文化講演会が10月下旬に行われた先例を参考にして、10月5日(金)に開催することに決めました。記念行事は記念講演会とシンポジウムとし、午前と午後に分けて行うことにしました。記念事業としましては、浄土宗文献室所蔵の「浄土教報」のデジタル化とその公開、記念資料『丹鶴叢書』の購入、『常照』記念号の刊行、貴重資料の公開、記念グッズの作成と配布等を企画しました。

このような新図書館開館10周年の記念事業を実施するに当たり、開館以来、館長として図書館の機能・サービスの充実・発展のためにご尽力頂きました故国枝利久、山田泰嗣、池見澄隆の三先生のご功績を称え、心から敬意を表しますとともに、本学図書館が今後も、吹き抜けの天井に描かれている「飛天」（岩崎甚一暁画伯筆）のように、華麗なる飛翔を続けるべく、現職員が一致団結して努力を重ねて参る決意を新たにしているところであります。

（やまざき たかや・教育学部 教授）

これからの大学図書館の 発展を願って

教育学部教授

山 田 泰 嗣



佛教大学開学80周年の記念事業として建設された新図書館（成徳常照館）は、はや開館10周年を迎えた。この間にあって新図書館が学習・教育、学術・研究の中核機関として、利用しやすい学習空間へと発展しつつあることは、嬉しいかぎりである。まず新図書館の企画から、今日の学習環境の整備に努めてこられた方々に心よりお礼を申し上げます。

大学図書館の使命は、図書館サービスの質にかかわるといえる。大学における図書館サービスは、資料の貸出・閲覧、レファレンス・サービスをはじめ、利用者が求める資料や情報、要求に、十分に迅速に対応しなければならない。

佛教大学の新図書館では、図書館サービスの充実にあたって大きな変化がふたつあったといえる。そのひとつは、図書館サービスをどこで処理することが望ましいかという課題からくる変化である。図書館では開館当時、貸出業務は二階で行われていた。またレファレンス・ワークは四階で行われていた。現在の一階の総合カウンター・エリアは、視聴覚メディアの視聴ブースになっていた。図書館に入館して正面に先ず飛び込んでくるのは、学生がビデオの視聴に興じる光景だった。

図書館サービスに関して、いつも脳裏から離れないことばがある。それはインドの図書館学者ランガナタンの「読者の時間を節約せよ」ということばである。ここには利用者と図書館職員との時間的な距離の問題がある。物理的な距離は、二点を結ぶ線分の長さを意味するが、読者の時間を節約することは物理的には解決できない問題である。人間には社会生活を営むために言語や文字、視覚や聴覚に訴える様々なメディアを媒介として、知覚

や感情、意志や思考の伝達が行われるコミュニケーションが重要である。これは二点を表す線分の長さではなく、接触面の深さで求められるから、心のなかにまで響きわたるものである。図書館サービスも常に利用者と接するわけであるから、コミュニケーションのあり方が問われているといえる。こうした理由からサービスカウンターを一階に移動させた。これが今日の総合カウンターが設置されるきっかけとなった。

もうひとつの図書館サービスの大きな変化は、情報社会の発展にともなってコンピュータやネットワークによる環境の変化に起因するもので、図書館にも必然的に導入されたものである。インターネットとデジタル技術の進歩・発展は、図書館の新しい情報基盤となりつつある。図書館に誰もが情報機器を利用できる施設としてサンサーラや、情報プラザが誕生したのもこの理由による。

今日も図書館は、なお学術図書資料等のデジタル化、アーカイブ化やデータベース化をとおして電子化への積極的な対応が迫られ、学術情報ネットワークのあり方や電子図書館への関係の強化が求められている。この充実・改善を図ることは、研究者間における研究資源及び研究成果の共有、蓄積されている知識を最大限に活用することで、図書館はきわめて重要な役割を負う存在となる。

佛教大学の図書館には、伝統的な文化的価値をもつコレクションがある。こうした特徴を生かしつつ各大学の教育研究の特徴とあわせたハイブリッド・ライブラリーが検討されることも、新しい図書館サービスの課題となろう。いっそうの発展を期してやまない。

（やまだ よしあき・平成11-14年度図書館長）

「読書力」以前

副学長・文学部教授

池 見 澄 隆



近ごろ、「なにになに力」という新しいタームがしきりに産み出されている。倫理力や治癒力から感化力・感染力・忘却力・鈍感力などまで多種多様であるが、人の資質や能力を領域や種類ごとに概括して表わす語である。多くは、教養書や処世のハウ・ツウものの書名に使われ、その書物のキータームであることは間違いない。

むろん学力・記憶力・理解力など、昔から使われている類例も少なくない。ただ興味ぶかいのは、それらは「学力」に典型的にみられるように、計量可能であり、かつ概念の明確なものが多かった。したがって、他と比較することも出来、評価の対象となりやすいものであった。ところが、冒頭の諸例は、計量不能もしくは至難であり、かつ輪郭の不透明であることを特色とし、潜在的な活力や美質をさす場合が多い。このため他との比較や客観的な評価はすこぶる困難である。しかもこれらは人間が生きていくうえで、あるいは特定の仕事を成すうえで必須の条件として求められるものである。

このような新しい「なにになに力」は、それがただちに一定の業績に結びついたり、名声・利益の獲得を約束するものでもない。このような「なにになに力」の流行は、従来、陽の目をみなかった人間的側面を再吟味すべし、という時代の反省のあらわれであるのかもしれない。

では読書に関する「なにになに力」にはどの

ようなタームが考えられるであろうか。一般に用いられてきた「読書力」というのは、読解力をはじめとする、内容の記憶力と想起力の総和であろう。それらはいずれも計量・比較が可能であり、評価の対象となりうる。しかし読書には、このような能力・資質のほかに、「なにになに力」がありうるのではないだろうか。

高名な作家の某女史は、こどもの頃、家に本がなかったので、「年中暦」の冊子をボロボロになるまで読んだという。また学徒動員で応召した学徒兵には、ひそかに一冊の愛読書を携行する者が多くいたという。これらのケースは書物そのもののきわめて貧弱な環境が、書物への飢餓感を生み出だしたものとえよう。これは書物への渴愛、いわば「愛書力」である。

しかしまた次のような場合もある。ある老碩学の述懐である。自分の息子は幼時から、哲学関係の蔵書がズラリと並んだ部屋で寝起きしていた。息子は朝な夕なその重厚な書物の背表紙を眼にして育ったのである。後年、かれが哲学を専攻するようになった確かな遠因がこの書物との親和性にある一。

書物への渴愛・親和・期待・想像・愛着・貪着は、「読書力」以前の「愛書力」である。こうした「愛書力」を喚起・涵養する工夫が大学図書館にも求められる。

(いけみ ちょうりゅう・平成15―17年度図書館長)

新図書館の歩み

1981(昭和56)年

開学80周年記念事業として新図書館建設を計画、館内検討を開始。その内容を11回にわたり「図書館新館建築のための資料」として『佛教大学学内報』に掲載。

- 4月 上田千秋教授、館長就任。
(1982年3月まで)
- 12月 図書館長の諮問機関として「新図書館研究会」発足。
『佛教大学学内報』に「新図書館研究会報」を掲載。

1982(昭和57)年

- 4月 水野恭一郎教授、館長就任。
(1983年3月まで)

1983(昭和58)年

- 4月 上田千秋教授、館長就任。
(1985年3月まで)

1985(昭和60)年

- 4月 藤堂恭俊教授、館長就任。
(1987年3月まで)
- 11月 合計15回の検討会を重ね、「新図書館研究会報告書」を館長に提出。同研究会解散。

1987(昭和62)年

- 4月 小森健吉教授、館長就任。
(1988年3月まで)

1988(昭和63)年

- 2月 「新図書館建設検討委員会」発足、同時に作業部会設置。
- 4月 岸勇教授、館長就任。
(1989年3月まで)

1989(平成元)年

- 2月 第1回検討部会開催。丸善(株)と「佛教大学新図書館(仮称)基本構想策定調査」について委託契約を締結。
(同年7月末日まで)

- 4月 國枝利久教授、館長就任。
(1999年3月まで)
- 8月 丸善(株)が「佛教大学新図書館基本構想報告書」を提出。

1990(平成2)年

- 5月 評議員会で新図書館建設が正式決定。あわせて建設予定地を鷹陵館北側に定めること、予定地にある第2鹿溪館の代替建物を6号館北側に建設することが決定。
- 6月 『常照』35号誌上に新図書館建設予定地が鷹陵館北側に決定したことを発表。

1991(平成3)年

- 1月 『常照』36号に新図書館に関する学生アンケート結果掲載。
- 7月 「新図書館建設検討小委員会」発足。

1993(平成5)年

- 9月 新図書館建設実施設計を(株)日建設計に依頼。

1994(平成6)年

- 4月 (株)日建設計が「新図書館(仮称)計画案」を提出。
- 11月 第5回新図書館建設検討委員会で実施設計案を承認。西松・宝・ダイテツJVが建設業者に決定。

1995(平成7)年

- 1月 着工。
- 4月 金剛(株)が新図書館地下書庫の積層式書架工事に関する設計図を提示。
新図書館建設募金事務局設置。
- 7月 『常照』40号に新図書館棟完成予想図を掲載。

1997(平成9)年

- 1月27日 竣工・完成。
- 4月7日 開館式。

5月13日 落成記念式典。 記念講演会開催。 「翔ける」(講師:梅棹忠夫氏) 9月20日 開館記念国際シンポジウム開催。 「宗教と伝統文化の将来」 22日～23日 開館記念国際シンポジウム開催。 「日中共同ニヤ遺跡学術研究」 22日～28日 「日中共同ニヤ遺跡学術研究出土文物展」開催。 24日 落成記念名曲コンサート開催。	2001(平成13)年 4月 第1次館内リニューアル実施。 総合カウンター設置 [1階] 視聴覚ブース移動[1階→2階] オープンパソコンスペース 「サンサーラ」設置 [1階] 10月 第5回名曲コンサート開催。
1998(平成10)年 5月2日～8日 新図書館建設一周年記念行事開催。 「平山郁夫シルクロード展 ―歴史に生かされ歴史に生きる―」 21日 通学・通信課程同窓会、保護者会、通信教育学友会、教育振興会等本学外郭諸団体の寄付金により、新図書館建設一周年を記念して「輪蔵」を製作。新図書館1階アトリウムに設置、除幕式挙行。 10月 第2回名曲コンサート開催。	2002(平成14)年 4月 業務システムをCALISから新CALISに変更。 10月 第6回名曲コンサート開催。
31日 新図書館一周年記念講演会開催。 「王朝文化と陽明文庫―近衛家の歴史―」 (講師:名和修氏) 尺八演奏家田島直士氏、ギター奏者松本吉夫氏による記念演奏会開催。 「陽明文庫展」開催。(11月1日まで)	2003(平成15)年 4月 池見澄隆教授、館長就任。 (2006年3月まで) 10月 第7回名曲コンサート開催。
1999(平成11)年 4月 山田泰嗣教授、館長就任。 (2003年3月まで) 10月 第3回名曲コンサート開催。	2004(平成16)年 10月 第8回名曲コンサート開催。
2000(平成12)年 10月 第4回名曲コンサート開催。	2005(平成17)年 4月 第2次館内リニューアル実施。 参考調査カウンター移動 [4階→1階] データベース端末設置 [1階] 業務システムを新CALISからE-Catsに変更。 8月 利用者アンケート実施。 10月 第9回名曲コンサート開催。
2006(平成18)年 3月 CD/DVD-ROMサーバリプレイス 視覚障害者用パソコンリプレイス 4月 山崎高哉教授、館長就任。 1階入口に入館ゲート設置。 10月 第10回名曲コンサート開催。	2007(平成19)年 5月 「浄土教報データベース」及び 「佛教大学図書館ポータルサイト」公開。 10月 新図書館竣工10周年記念講演会・シンポジウム開催

<参考資料>

佛教大学図書館報『常照』

『佛教大学学内報』

『佛教大学の歩み』1982-1992, 1992-2002

古典籍を中心とした 主な購入資料（最近10年間）

●和書●

十二門論宗致義疏 一帖
 佛道修行教文 一帖
 草根集 五帖
 選擇本願念佛集（浄土教版） 二帖
 浄土二祖対面図
 法然上人像
 洛中洛外図屏風 六曲一双
 至宝『日本の絵巻物』完全復刻シリーズ
 十二問答 一帖
 前川家資料（什器類含む）
 十二月あそび 二軸
 羅生門 二軸
 江戸時代女性文庫 全100巻
 江戸時代女性文庫 補遺 女筆手本類 全12巻
 選擇伝弘決疑鈔 5冊
 寶永花洛細見圖 15冊
 大江山奇譚（『酒吞童子』絵巻） 三軸
 北野宮寺大工職関係文書 一卷
 文藝時評大系 全73巻・別巻5



浄土二祖対面図

●中国書●

四庫禁毀書叢刊 全310冊・索引1冊
 四庫未収書輯刊 全301冊・索引1冊
 続修四庫全書 集部 全200冊
 中国地方志集成 江蘇府縣志輯 全68冊
 中国地方志集成 浙江府縣志輯 全68冊
 中国地方志集成 湖南府縣志輯 全86冊
 中国地方志集成 広東府縣志輯 全51冊
 中国地方志集成 北京府縣志輯 全7冊
 大連図書館蔵孤稀本明清小説叢刊 全55種



選擇本願念佛集

●洋書●

The Lindisfarne Gospels
 ボルソ・デステの聖書 全2巻
 Oxford dictionary of national biography 60vols
 Charles Booth コレクション



洛中洛外図屏風（左隻）



洛中洛外図屏風（右隻）



羅生門

開館日数・入館者数の推移

	開館日数	入館者数
平成9年度	310	557,309
平成10年度	306	633,394
平成11年度	309	637,285
平成12年度	308	639,333
平成13年度	310	665,882
平成14年度	320	697,067
平成15年度	321	633,120
平成16年度	299 (※1)	588,304
平成17年度	319	596,115
平成18年度	318	437,486 (※2)
総 計	3,120	6,085,295

※1 当該年度末に図書館業務システムのリプレイスならびに館内リニューアルを実施したため、開館日数減となった。

※2 当該年度より入館ゲートを設置し、入館管理を開始した。

蔵書数の推移

	図 書 (単位：冊)			雑 誌 (単位：種)		
	内国書	外国書	計	内国書	外国書	計
平成9年度	541,816	120,936	662,752	5,245	1,141	6,386
平成10年度	556,331	127,869	684,200	5,427	1,540	6,967
平成11年度	574,746	134,212	708,958	5,566	1,920	7,486
平成12年度	591,797	141,403	733,200	5,705	2,061	7,766
平成13年度	608,449	147,999	756,448	5,753	1,965	7,718
平成14年度	622,057	153,378	775,435	5,800	1,970	7,770
平成15年度	632,849	159,055	791,904	5,812	1,972	7,784
平成16年度	641,892	164,486	806,378	5,767	1,968	7,735
平成17年度	659,662	168,356	828,018	8,630	2,724	11,354
平成18年度	671,337	175,065	846,402	8,747	3,150	11,897

『丹鶴叢書』まぼろしの甲寅帙

古川 千佳

本学新図書館竣工十周年にあたり、記念資料として『丹鶴叢書』の購入が決定された。

『丹鶴叢書』は紀州藩附家老・水野忠央（みずの ただなか 一八一四—一八六五 新宮城主、丹鶴と号す）の輯刻になるわが国の代表的叢書のひとつである。同叢書は弘化四（一八四七）丁未年から年を追って、戊申（一八四八）年、己酉（一八四九）年、庚戌（一八五〇）年、辛亥（一八五一年）、壬子（一八五二年）、癸丑（一八五三年）、と数点あるいは十数点ずつ計百五十四冊が刊行されている。また、これらの叢書とともにほぼ同時期に外書と称される図書が数点刊行されている。「丹鶴外書」と冠した『大系圖画引便覧』および『丹鶴圖譜』ずふ ちとせのためしなどである。

収録刊行された図書の底本は、輯刻者・水野忠央の新宮城内文庫（私設図書館）である丹鶴書院の蔵書を核としている。底本に関する情報は、巻末あるいは各帙節目の書に付された巻末書目に明らかにされ、それによるとおおむね写本である。文字だけの著作のほか絵巻、絵詞、図なども含まれ、それらは彩色されたものも多かったようである。本文に翻刻される文字の正誤・点画・筆致等はいうにおよばず、使用されている紋様の名、色目などに至るまで読者に原

本の姿を忠実に伝えるべく、かつ本文を邪魔せぬよう小字で雕り込むなどの工夫もなされている。刊行にあたっての本文校訂は厳格を極めており、校勘・出版に対する姿勢は、ある種図書館のありかたをも考えさせるものである。

本学に受入れる丹鶴叢書（以下、本学叢書と略す）のうちもっとも多くを占めているのは、蔵書印記「櫻蔭文庫」が示す大阪の実業家、茶人数寄者・平瀬露香（ひらせろこう 一八三九—一九〇八）の旧蔵になるもので、全体としては取合せ本である。

外書は三点とも複数の所蔵者を経て今日に伝わるものである。『大系圖画引便覧』『丹鶴圖譜』に残された蔵書印記のひとつ「東洲文庫」「陽春廬記」は、それらが、幕末・明治初期の国学者・小中村清矩（こなかむらきよのり 一八二一—一八九五）の手にあったことを教えてくれる。小中村清矩は和歌山藩校の国学教授となった人物で、師のひとり村田春野は山田常典とともに同叢書校勘編纂の中心的役割を果たした人である。清矩本人も丹鶴書院に入って『止戈類纂』ちかゝるゝさんの編纂に従事しており、丹鶴書院蔵書および丹鶴叢書刊行に深くかわりのある人物の手にあったものであることがわかる。また蔵書印記「陽春廬記」は、東京大学蔵南葵文庫、あるいは国文

学研究資料館蔵の丹鶴叢書にも残されており、その繋がりをおぼえずにはいられない。

さて本学叢書は旧蔵者以外にもいくつかの特徴をもつ。

ひとつは、刊行終了後には処分されてほとんど残ることのない校正刷本を含んでいることである。他館にも僅かずつ分蔵されているところから、もとは輯刻者に近い所で出版後も大切に保存されていたであろうこと、あるいは、比較により校正刷にも数段階あることを窺い知ることができる。本学叢書中の校正刷は、『蒙古襲来繪詞』（もうちゅうらいえご）『紫式部日記画巻』（むらじきぶにきえまき）『日本總國風土記』（にっぽんそうこくふうどき）『今昔物語集』である。これらは、書名を打ち付け書きした表紙で仮綴じされ、各冊各丁に確認印が押されている。喉に見える「(中) 篤尚堂」「(書林) 篤尚堂」「飯田刻」の印に加えて、「金」「水」「己」「瀧」「安」「紋」「與」「伊」「卜」「谷」「榮」「多」等の小印がそれぞれである。

「篤尚堂」は、刊記にみられる賣弘所（うりひろどころ）の最後尾に名を連ねている江戸書林・中屋徳兵衛である。「飯田刻」の「飯田」は他の賣弘所である出雲寺文次郎（京都）、秋田屋太右衛門（大阪）、河内屋喜兵衛（大阪）、岡田屋嘉七（江戸）のいずれかの書肆（であれば共同出版の連携進行上、中屋徳兵衛と同じく江戸の書肆である岡田屋嘉七がもっとも可能性が高いように思われる）あるいはそれらとかかわりの深い版木屋の本姓かもしれない。いずれにしても製作を請け負った書肆あるいは版木屋のいわば店名印であろう。

小印は書肆あるいは版木屋から版木一枚一枚を託された彫り師個人名の一文字とみられる。各丁に彫り師の責任をも明らかにするような厳密な校正跡を筆者はほかに知らない。

本学叢書の校正刷本はおおむね校了本にちかく、本刷直前のものと思われる。筆者の実見した他機関（静嘉堂文庫、東京大学総合図書館）蔵校正刷本のうち静嘉堂文庫に蔵されるものはおそらく初校本であろう、欄外、行間とも朱校、付箋等による指示・訂正の跡がきびしく残されている。

もうひとつの特徴とは甲寅帙（こういんち）の存在である。

丹鶴叢書は弘化四年から嘉永六年まで七年に亘り、その千支にちなんだ帙名を付して刊行され、それは癸丑帙（さくらうしち）を最後に中断したといわれている。

同叢書の『今昔物語集』は庚戌帙（こうじゅうち）に卷二十二から三十一まで、辛亥帙（しんがいち）に卷十一から十二まで、壬子帙（じんしち）に卷十三から十四まで、癸丑帙に卷十五から十六まで収録されていることが知られているのであるが、本学叢書にはそれにつづく卷十七（二冊）が含まれているのである。

当該卷二冊はいずれも公刊本ではなく、校正刷である。同じく校正刷の卷十三から十六が丹鶴紋様の空押し表紙を使用し、校正後の確認印を押したものであるのに対し、その表紙は同色の布目表紙を用い、まだ確認印は押されていない。貼紙による刷訂正跡、わずかな朱校等から再校以降の刷りに手を入れはじめたと推測される。端然とした版面の中央、柱（版心）に「丹鶴叢書」と刻んだ全体のレイアウトは他の公刊本と同様であるが、卷十七の喉には「今昔甲子（こういん）（『寅』）」と刻されている。

同叢書の版の喉には一部を除いて所収細目書名の略称が刻まれている。千支帙を分かち、年を嗣いで刊行されたものについては、二番

目以降の書名略称の後に干支名を、また同じ干支帙のなかでも、おそらく時を隔てて刊行されたものには、さらに序数が付されている。

『今昔物語集』の喉には庚戌帙を筆頭に「今昔」「今昔辛亥一」「今昔辛亥二」「今昔壬子一」「今昔壬子二」「今昔癸丑一」「今昔癸丑二」と刻されており、嘉永三年から六年までの四年間に七度に分けて開版されたものと思われる。

「今昔甲子一」の存在は、つまりは、嗣いで「今昔甲子二」が刻される、あるいは刻されつつあることをも示唆している。

『今昔物語集』巻十七は、あとすこしの校正を経て、さらには続巻も世に出るところであったと考えられる。標題に「まぼろし」と付したのはこのためであるが、現存することたしかなのである。

以下に本学叢書収録書目と冊数を挙げる。各冊外題、内(首)題、巻末書目に掲げられる書名ではわずかず表記の異なるものもあるが、ここでは内題(ないものは外題を)を挙げることにする。

なお、『紫式部日記画巻』『日本總國風土記』の公刊本はそれぞれ一冊として製本されているが、本学のものとは校正刷であるため合綴されている。また、残念ながら叢書中ただ一冊『大納言經信卿集』を欠いている。

本学叢書の調査にあたり、この夏いくつかの丹鶴叢書所蔵館(京都女子大学図書館、京都大学附属図書館、国文学研究資料館、国立国会図書館、静嘉堂文庫、東京大学総合図書館)の蔵書を拝見させていただいた。大部な叢書の出納にもかかわらずこころよく応じてくださったことに心より感謝申し上げる。

(首席専門員・ふるかわちか)

本学受入丹鶴叢書収録書目

【丁未帙】(弘化四年)	
正中御節記・内宮御神寶記	合刻一冊
後水尾院當時年中行事	二冊
春記・春記裏文書	二冊
九條右大臣集・御堂關白集・家經朝臣集	合刻一冊
和泉式部續集	二冊
源重之むすめの集・小侍從集・殷富門院大輔集	合刻一冊
風につれなき物語	二冊
【戊申帙】(嘉永元年)	
釋奠供物圖・諸陵雜事注文	合刻一冊
雜筆要集	一冊
春記	十一冊
室町殿春日詣記	一冊
掇弓藤割次第・諸鞍日記	合刻一冊
九條家車圖	一冊
西園寺家車圖	一冊
萬代和歌集	十冊
前參議教長卿集	三冊
濱松中納言物語	八冊
乙寺縁起	一冊
【己酉帙】(嘉永二年)	
侍中群要	四冊
信實朝臣集	一冊
草根集	十五冊
繪師草紙	
蒙古襲來繪詞	一冊
【庚戌帙】(嘉永三年)	
三條中山口傳	三冊
今昔物語集	二冊
(巻三十二・三十三)	二十二冊
しのび物語	
【辛亥帙】(嘉永四年)	
日本書紀(神代卷)	二冊
東大寺要録	十冊
風葉和歌集	四冊
今昔物語集(巻十一・十二)	四冊
【壬子帙】(嘉永五年)	
今昔物語集(巻十三・十四)	四冊
紫式部日記画巻・日本總國風土記(牟婁國)	合綴一冊
北山抄	十三冊
【癸丑帙】(嘉永六年)	
古事談	六冊
今昔物語集(巻十五・十六)	四冊
和歌一字抄	二冊
基盛朝臣鷹狩記	一冊
【甲寅帙】(嘉永七または安政元年予定)	
今昔物語集(巻十七)	二冊
【外書】	
大系圖画引便覽	四冊
丹鶴圖譜	三冊
千歳例	一冊

JOSHO
BUKKYO UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN



竣工時の図書館

常 照 — 佛教大学図書館報 第56号

平成19年10月1日 発行

編集・発行 佛教大学図書館

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

TEL 075(491)2141

FAX 075(493)9042

印刷 株式会社 図書印刷 同朋舎

<http://www.bukkyo-u.ac.jp/lib/>

